

私たちの町の遺跡 大名墓物語 細川家の人々

■第8話 名君が残した謎

宝暦の改革を断行し「肥後の鳳凰」と称された名君、肥後細川家6代藩主重賢。妙解寺（みょうげじ）跡にある彼の墓石を見ると…?!。雪見灯籠のようでもあり、前衛アートのようにもあり…、何だか解らない形をしています。少なくとも「石塔」には見えません。

ところが…。これは確かに石塔として立てられたものらしいのです。墓石の周りを見てみると、これを囲む石柵が48本、中の墓石が1つ。 $48+1=49$ 。この49という数、四十九日の法要があるように仏教と関わりが深い数です。恐らく偶然ではないでしょう。48の卒塔婆に囲まれた内部に仏の姿を表す五輪塔などの石塔を立てた墓を四十九院墓といいます。四十九院とは、成仏のための聖なる道場であり、五十六億七千年後の未来のために弥勒菩薩が修行している場だという教えもあります。重賢の墓石は、一見すると何だか解らないものですが、墓全体としてみると四十九院の石塔を表したものだと考えられるのです。

インテリでちょっと皮肉屋だったという細川重賢。「者供、この墓の意味が、儂（わし）が残した謎が解けるか?」。ニヤリとしながら問いかける名君の姿が浮かんでくるようです。

熊本市文化振興課 美濃口雅朗

名君、重賢も奥深いウイットが解る人だったのかも…

